

# Mac OS X Public Beta の和文書体環境

## 画面書体の品質向上と 72dpi 脱却とを求める

渡辺 慎太郎 (nabesin@m-net.ne.jp)

Mac OS X Public Beta(以下 OS X)の日本語書体環境を Mac OS 9 以前(以下 Classic)のそれと比較してみたところ、以下の結論を得た。

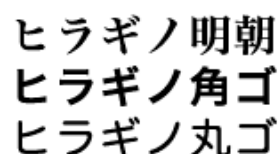
- ・印刷書体環境は OS X で格段と向上した。
- ・画面書体環境は一部向上したが、根本的には変わっていない。部分的には悪くなった点もある。
- ・OS X に必要なのは、よりよい画面書体と、複数 dpi への対応である。

### 印刷書体環境は格段に向上

OS X の日本語環境の特徴は、印刷書体に大日本スクリーン製造のヒラギノシリーズが選択された点にある(図 1)。明朝体では 2 種類、角ゴシック体では 3 種類の異なるウェイト(太さ)が用意され、使い勝手がよくなった。また、ヒラギノ丸ゴシックも含めて字工房一社が設計を担っているので、書体の統一感も向上した。何より、書体そのものの出来が以前よりもよくなったことが大きい。

漢字 Talk 7 から、Classic には日本語 TrueType 書体が標準で付属してきた。その一覧を見ていくと、平成族たる平成明朝・平成角ゴシック(Osaka の和文部分は平成角ゴシック)、モリサワのリウミンライト・KL・中ゴシック B B B、そしてリョービの本明朝・M・丸ゴシック体が挙げられる。平成族以外は、Mac OS 9.0.4 の段階で姿を消した。

これらの TrueType 書体は一般利用者の書体選択の幅を広げた点で価値あるものだったが、書体の品質はさほど高くない。また、各社から



ヒラギノ明朝  
ヒラギノ角ゴ  
ヒラギノ丸ゴ

図 1 ヒラギノ書体

バラバラに書体を採用する一方でウェイトのバリエーションは少なかった。

新しいヒラギノ書体は OpenType 書体である。OpenType 書体の出自には TrueType のものと PostScript のものがあるが、ヒラギノは PostScript 出身のようだ。なお、Windows 2000 は PostScript Type1 書体や OpenType 書体に対応しているので、実は OS X のヒラギノ書体をそのまま利用することができる。(が、もちろんやっちはいけない。)

このように、印刷面においては OS X は良好な性質を有している。

なお、旧来の日本語 PostScript 印刷機のために細明朝体・中ゴシック体を利用したいときには、それらのスーツケースを/Library/Fonts ディレクトリに収納するとよい。また、OS X はヒ

ラギノ以外に平成書体と Osaka 書体を搭載している。

#### メニューの改善

次に、画面書体を見てみよう。

メニューバーを一瞥してすぐに気がつくのは、

- ・書体の大きさが大きくなった。
- ・和文プロポーショナルが実現された。
- ・アンチエイリアス(輪郭をぼかす)処理がなされた。

という3点だろう。これらは、Classic のメニューと比較してみれば判然とする(図2)。

このうちの前者2点は、はっきりとした改良だと言える。一般に、書体が大きくなれば必要な空間は増えてしまう。そこを、詰め組によって回避したわけだ。もともと OS のメニューにはカタカナが多く、詰め組の余地が大きかった。MS Pゴシックや MS UI Gothic などの和文プロポーショナル書体をもつ Windows 環境に比べ、専用アプリケーションでしか詰めが行えない Mac OS は不利な立場にあった。が、それは解消されたようだ。(ただし、和文詰め組は本文書体においては行なうべきではない。MS Word が標準の本文書体に等幅の MS 明朝を採用しているのは、なかなかの見識だと思う。)

これに対して「改良」とまで言い切れないのが、3点目のアンチエイリアス処理である。ブラウン管ならともかく、液晶ディスプレイにアンチエイリアスはそぐわないというのが私の持論なのだが、メニューに関しては大きな害悪はないので、次の項目で触れることとしたい。

#### 写実主義の罨

OS X の視覚的な特徴は写実主義にある。このことの是非については、いろいろな意見があ

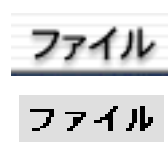


図2 メニューバー比較

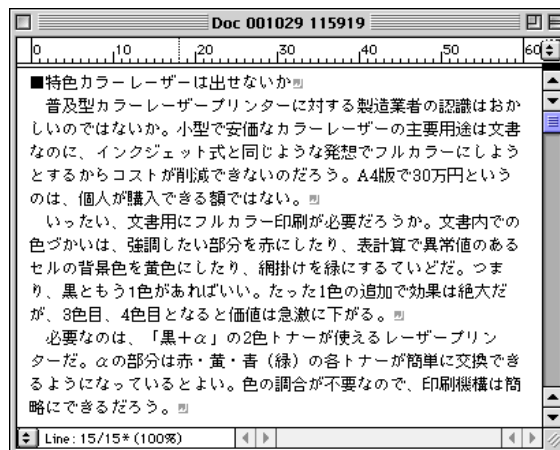


図3 ゴシックはどこ?

ろう。この記事では書体を主に扱うためアイコンなどについては言及を避けるが、上手な似顔絵が写真以上に人物の判定を助けるのと同じく、適切にデフォルメされたアイコンは写実以上にその機能を知らしめる、とだけ述べておく。

ところが、画面書体 ことに本文書体になると、写実主義はうまくいかないと言ってよい。理由は至極単純で、画面解像度が印刷時のそれよりも圧倒的に低いことに求められる。

図3は、Classic 環境で、リュウミンライト - K L と中ゴシック B B B との 12 ポイントを用いた書類の編集画面である。あなたは、どの部分が明朝でどの部分がゴシックかわかるだろうか。それがわかれば、かなりの書体通(もしくはオタク)だ。答えは、見出し(1行目)の部分と、12行目の「黒ともう1色があればいい」という部分である。

12 ポイントだとまだわかるかもしれないが、実際には 12 ポイントというのは印刷する

とかなり大きく、日常的にはもっと小さな大きさ(たとえば10ポイント。5号活字が10.5ポイント)の書体を使う。そうすると、もはや全然わからない。

これに対して、図4はどうだろう。細明朝体と中ゴシック体という、古くからあるPostScript書体を使ってみた。今度は一目瞭然だろう。

実は、細明朝体とリュウミンライト - KLとは、たとえばApple LaserWriter 16/600 PS-Jによる印刷においては日本語部分はまったく同じ出力が得られる。しかし画面でのわかりやすさの点でいえば、細明朝体・中ゴシック体のコンビのほうが出来がよい。古いほうが出来がよいなんて、まるでUNIXとDOSみたいではないか。

リュウミンライト - KL・中ゴシックBBBコンビの敗因はどこにあったのだろうか。それは、写実にこだわりすぎたことだ。たしかに、中ゴシックBBBのウェイトはそれほど太くはない。しかし、一緒に使われるリュウミンライト - KLとの差を出すためには、思い切って太くすることが必要だった。また、中ゴシックBBBの長音記号「ー」を見てほしい。たしかに、ゴシック体は印刷時には筆の入りはない。しかし、このままではマイナス「-」と区別できないだろう。中ゴシック体のほうは、マイナスと区別できるように筆の入りにアクセントがつけてある。

よりよい画面書体を

Classic環境のTrueType書体には上記のような欠点があった。では、OS Xではどうなっただろうか。結論から言ってしまうと、12ポイント未満ではいっそうわかりづらくなってしまった。

図5を見てみよう。これは、OS Xでヒラギ

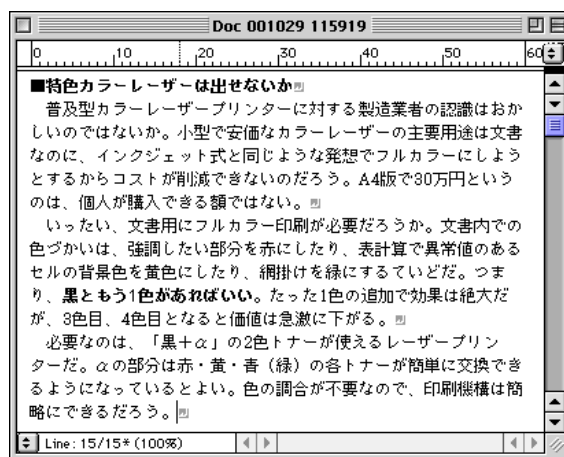


図4 細明朝 + 中ゴシック

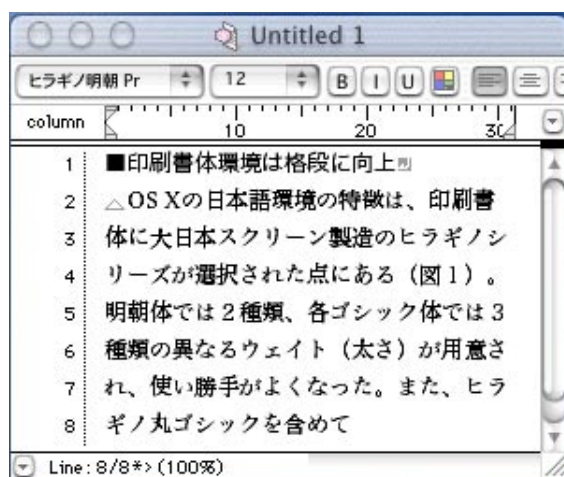


図5 ヒラギノ12ポイント

ノ明朝 W3 (Wはウェイトを表わす。数字が大きいほど太い) とヒラギノ角ゴシック W3 を、それぞれ12ポイントで使用したときの編集画面だ。

アンチエイリアスの画面の受けとりかたは様々だろう。私はアンチ・アンチエイリアスで、低質なビデオカードを安物のCRTに接続したときの出力を彷彿とさせる画面は嫌いだ。が、ここではそれに救われるかたちとなっている。少なくとも、明朝とゴシックとの区別はできる。

これを10ポイントにまで縮小しよう。10ポイントというのは、一般の書類で使われる本文

書体の大きさに近い。その結果が図6だが、見るも悲惨な結果になっていることがわかる。

つまり、アンチエイリアスが効かない上、適切なビットマップ書体がないために、グシャグシャ(あえて漢字をあてれば患者患者)としか言いようのない醜い画面になる。(図6を画面上で見た場合、アンチエイリアスがかかっているように見えるかもしれない。しかし、それは画面本来の姿ではない。印刷すると実態に近づくようだ。)

以上の流れを大局的にとらえると、どうもアップルは画面用のビットマップ書体を軽視する方向にあるようだ。しかしながら、液晶のようなマスのはっきりした表示装置では、ドットを1つ1つ記述したビットマップ書体のほうが適切だと私は考えている。画面書体の点で見ると、Mac OSはWindowsに劣る。これは悲しいことだ。

#### 72dpiからの脱却を

ところで、10ポイントでもアンチエイリアスによって見栄えを解決する方策がある。それは、画面の基本解像度を高めることだ。Mac OSは長らく基本解像度として72dpi(dot per inch)を採用してきたが、そろそろこの値を大きくすべきだと思う。せめて、複数の基本dpiをもつようになってほしい。

画面解像度が72dpiとすると、PostScriptの1ポイントは1/72インチなので1ポイント即1ドットということになり、計算はしやすい。12ポイントならば12ドットだ。この明快さが、初期のDTPを支えたのだろう。

だが、現実には画面解像度を72dpiで使用する者はごくわずかとなってしまった。たとえば17インチモニターでは832×624ドットが72dpiだが、多くの利用者は1024×768ドット以上の表示をしているだろう。

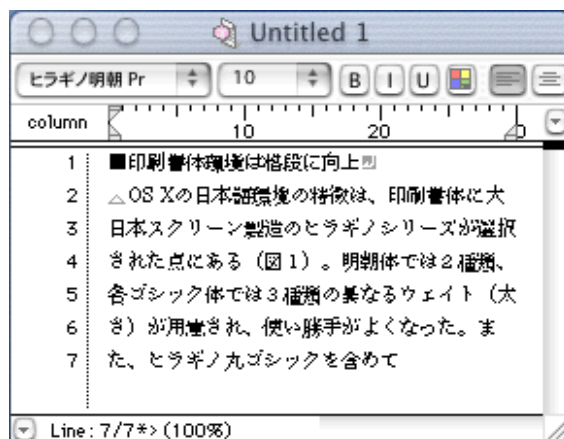


図6 ヒラギノ10ポイント

また、低いdpiは目を悪くした者や高齢者に負担を強いる。当たり前だが、12ポイントの文字を12×12ドットで表示するより、16×16ドットで表示したほうが見やすい。ちなみに、実際のClassic環境では1ドット分が空白にとられている。

ここでまたWindowsを持ち出すと、このOSは「低解像度」設定でも96dpiだ。さらに、高解像度設定で120dpiにまで高められる。入力をWindowsで行ないMacで編集するといった役割分担をすることがあるが、それは画面確認を主とする入力環境としてはWindowsのほうが適しているからだ。(なお、このあたりの詳細は、<http://www.m-net.ne.jp/~nabesin/l-mura-r-9907.html#00000039>を参照していただきたい。)

Mac OS Xは、72dpiとの決別に最もふさわしいバージョンアップである。これを機会に、画面書体環境を向上させてほしい。

わたなべ しんたろう

2000年10月29日